

川尻中村遺跡の調査

畠中俊明（公益財団かながわ考古学財団）

はじめに

調査は、津久井広域道路建設に伴い平成8年1月から平成10年3月まで実施されました。相模川の上流に位置する小倉橋の上に新小倉橋を架ける橋梁工事に伴い、左岸は川尻中村遺跡、右岸は原東遺跡といった二つの遺跡を調査し、両遺跡とも縄文時代中期の集落跡が発見されています。

「ハッチ」の愛称で知られ、当財団のマスコットとなったハチマキ土偶は、川尻中村遺跡の縄文時代中期の集落から発見されました。ここでは、発掘当時のエピソードをご紹介します。ながら、ハッチ誕生のお話をいたします。

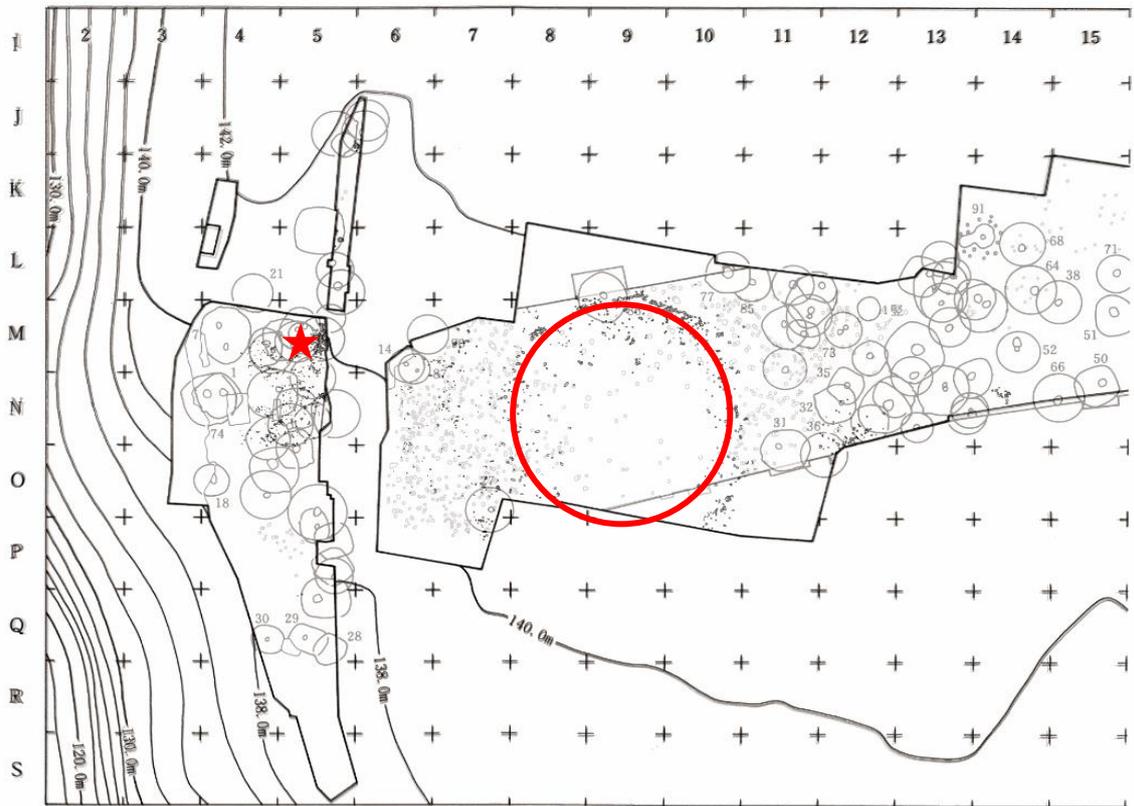


第1図 遺跡位置図

川尻中村遺跡の概要

川尻中村遺跡は、相模川の左岸に面した標高およそ140mの河岸段丘上に位置しています。遺跡のすぐ西側には、現在は相模川へ合流する谷津川が流れ、縄文時代早期・中期・後期、及び奈良・平安時代の遺構・遺物が出土しています。中でも、縄文時代中期後半（約4,500～4,000年前）には、列石が土坑群を取り囲むように弧状に配され、列石の外側に住居が築かれる、いわゆる環状集落として栄えていたことが判明しました。

縄文時代の竪穴住居跡は91軒発見され、うち80軒近くが中期後半の所産であろうと

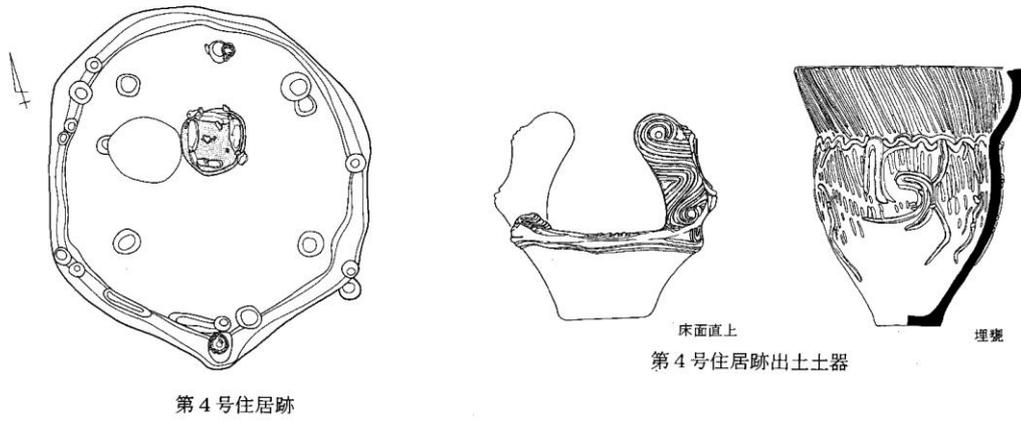


第2図 遺構配置図（列石と住居跡） ★ハッチ出土位置

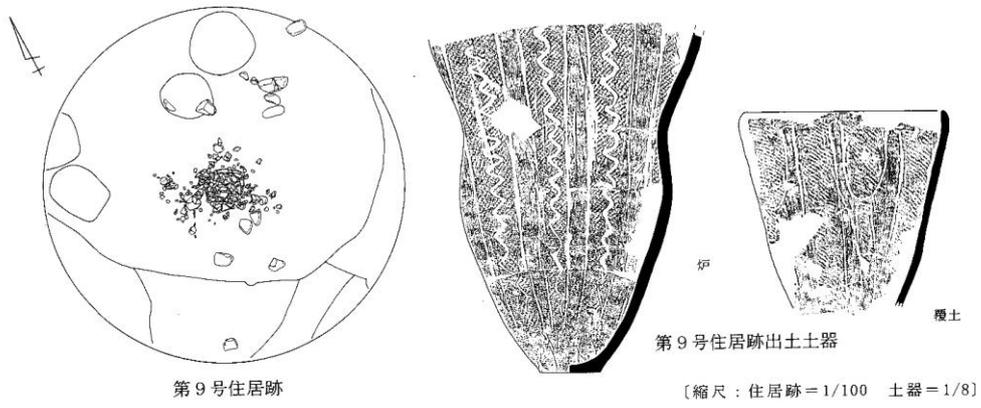
推定され、径約 150mの範囲に「調査区外に展開しているものも含めると、約 160 基程度の規模を持つ集落であったと推察できる。」とされています。

本遺跡において、土偶は 40 点出土しており、そのうちの 23 点が住居跡内からの出土であると報告されています。環状集落内における「住居の平面的な分布をみると、①複数の住居が著しく重複する住居群、②かなり近接しているが、他の住居と重複しない住居群、③集落のまとまりから 90m以上離れて点在するように分布する住居」が認められ、ハッチは、①複数の住居が著しく重複する場所から発見されています。ハッチは 9 号住居跡に帰属すると報告されていますが、4 号・15 号・19 号・22 号・24 号・25 号住居跡が重複していました。また、隣接する 4 号住居跡からは、優美な装飾の施された、釣り手土器が発見されました。その他、4 号住居跡からはスタンプ形土製品が出土しています。発見された土偶の多くは、住居跡の密集する場所から出土する傾向が強いと思われます。なお、ハッチ同様の目隠し土偶は、相模原市田名花ヶ谷戸遺跡や町田市忠生遺跡などで確認されています。

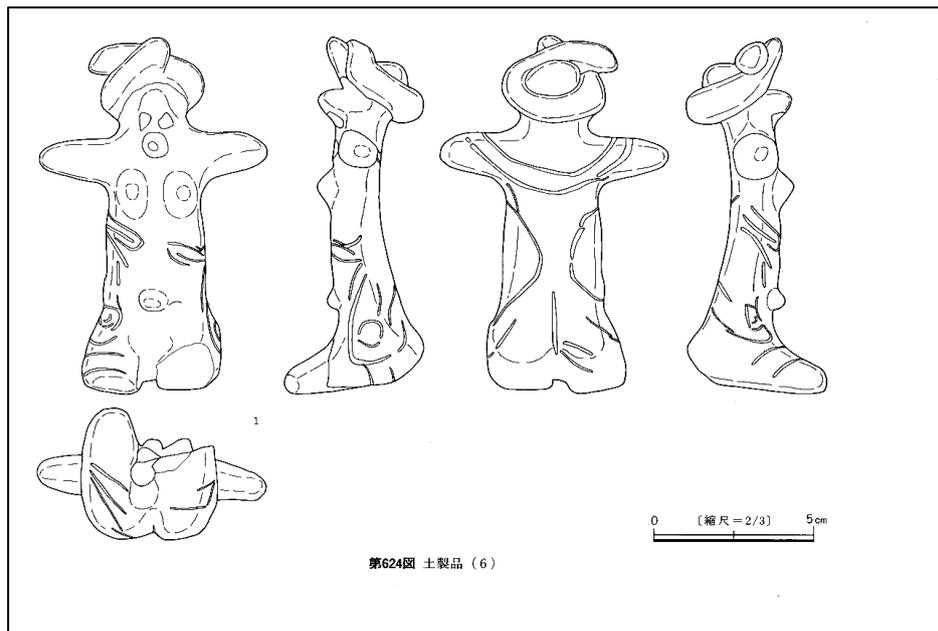
*写真及び図版は、『川尻遺跡』神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告 23 より転載



第3図 4号住居跡と出土土器



第4図 9号住居跡と出土土器



第5図 土偶展開図



写真1 環状列石

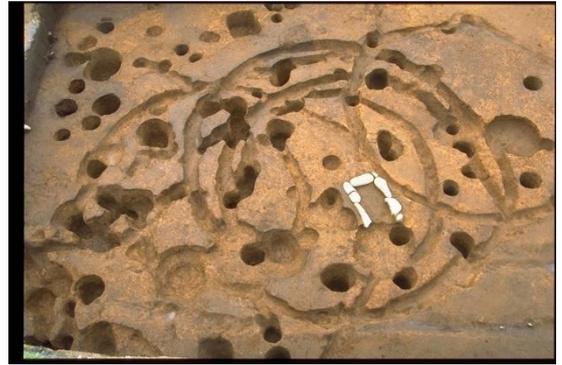


写真2 重複住居跡



写真3 9号住居炉跡



写真4 土偶出土状況



写真5 出土した土製品